

文学の研究は常に文学の本質の究明と文学の評価の基準の決定という問題を伴うということが出来る。そしてそういった問題の解答は文学の歴史と文学批評の歴史のうちに見出さねばならぬというのが私の主張であり、従って私の研究の領域は文学および文学批評の歴史であるといえる。しかしながら、文学や文学批評の歴史は実に宏大で、そのすべてに亘っての研究は到底不可能であるといってもよい。私はまず第一に古典主義の文学やその批評の立場を研究するためにマシニュー・アーノルドを取り上げ、その研究にうち込んだが、しかしその理論は余りに常識的に過ぎ平板な感じがしたので、より哲学的で理想主義的な理論を求め、その結果見出したのがコールリッジであった。このローマン主義時代の代表的詩人であり批評家である大人物は、その巾の広い思想体系と深遠な学説の故に、巨人の手を以てつかむかのように私をつかみ、容易にはなさうとしないのである。十年程前、「ワーズワスとコールリッジ」と題した小研究を発表したことがあるが、これはこのロー

マン主義の二巨頭の交遊が、如何にお互の人格構成と作品の創作に作用したかを述べたものであるが、これはいわば道くさのようなものであった。私の本筋の研究は、コールリッジを中心として文学の本質を追究することであり、文学評価の基準を闡明す



コールリッジ評伝と研究

岡本昌夫

ることである。そういう研究において非常に重要な指針を与えるものは、イギリス文芸批評における想像力説の伝統であると考へ、昭和二十四、五年ころからその研究に着手し、昨今一応の結実を得てその一部を同志社大学の「人文文学」誌上に発表し、更

にコールリッジの評伝研究と合せて「コールリッジ評伝と研究」と題して京都あばろん社より最近出版した。

想像力説というのは文芸創作の原理を想像力なる能力に帰し、想像力を独創的精神の根源と見る考であつて、イギリスにあつては、十七、八世紀から次第に発達して、コールリッジにおいて理論的に確立され、それ以後ラスキン、ペイター、リードなど一流の批評家によつて受けつがれ、今日最も重要な批評学説となつてゐるものであつて、この思想の解明は極めて重要な意味を持つものと考えられるのである。

以上の研究を本筋として、私の研究はイギリス批評史の全面に拡がり、またポーのようにコールリッジの影響の下に想像力説に傾倒するアメリカ批評家の研究にも及んでいるが、近ごろは余り慾ばらぬことにしている。

最近明治以後のわが国における文芸理論にも興味がわいてゐるが、今のところどこまで発展するか未知数である。

(文学部教授・英文学史)